第４節　７区⑥の調査

１．調査の経過

７区⑥は、７区④と７区⑤の中間に位置する調査区で、平成 22 年度に発掘調査を実施した。発掘調査面積は 1,490㎡である。

平成 22 年５月 24 日から重機により表土の除去を開始し、黒色腐植土層（Ⅱ層）の上面（標高約 2.5m）まで掘削した。６月７日から人力により黒色腐植土層の掘削を開始し、黒色腐植土層下では、平安時代後半の大畦畔と考えられる東西及び南北方向の高まり（畦状遺構１・２）を検出し、７月 30 日までにこれらの記録を終えた。

その後、古代の耕作土層（Ⅲ層）の掘削を行い、少量ではあるが古墳時代後期～平安時代後期の土師器・須恵器などが出土した。この層の下面では調査区南部で土坑、溝、ピットを検出しており、９月 17 日にこれらの記録を終了した。

続いて古墳時代の遺物包含層である黒色系粘質土層（Ⅳ層）を調査し、シルト層（Ⅴ層）上面まで掘削した。シルト層上面は調査区の南北で高く、中央及び西側が低くなっており、７区⑤で確認された落ち込み状の地形が続いていることがわかった。調査区の南東側で、東西方向の溝（SD02）やピットなどを検出し、10 月 29 日までにこれらの記録を完了した。

当初の予定ではシルト層上面の遺構を完掘した段階で調査を終了する予定であったが、調査区周囲に掘削した排水溝において下層から遺物が出土したため、遺物出土状況と遺構の有無を確認することを目的に、11 月２日からシルト層の面的な掘削を行った。11 月８日に東西方向の河道跡（SR01）とこれに合流する流路跡（SR02）の平面プランを検出し、排水溝出土遺物は SR01 に伴うことが分かった。続いて河道堆積層の掘削を行ったが、遺物は弥生土器片などがわずかに出土するにとどまり、人工的な遺構ではないことが明らかになったため、SR01 の底面は確認できなかったが、検出面から最大１m 程度掘削したところで調査を終了した。なお、SR01 に切られた土層において弥生時代後期前葉の土器群を検出している。11 月 24 日に調査区の堆積環境や土地利用状況を分析するため土壌サンプリングを行った。調査区の埋め戻しを 11 月 25 日から開始し、12 月１日に完了した。

２．基本層序（第 186 図）

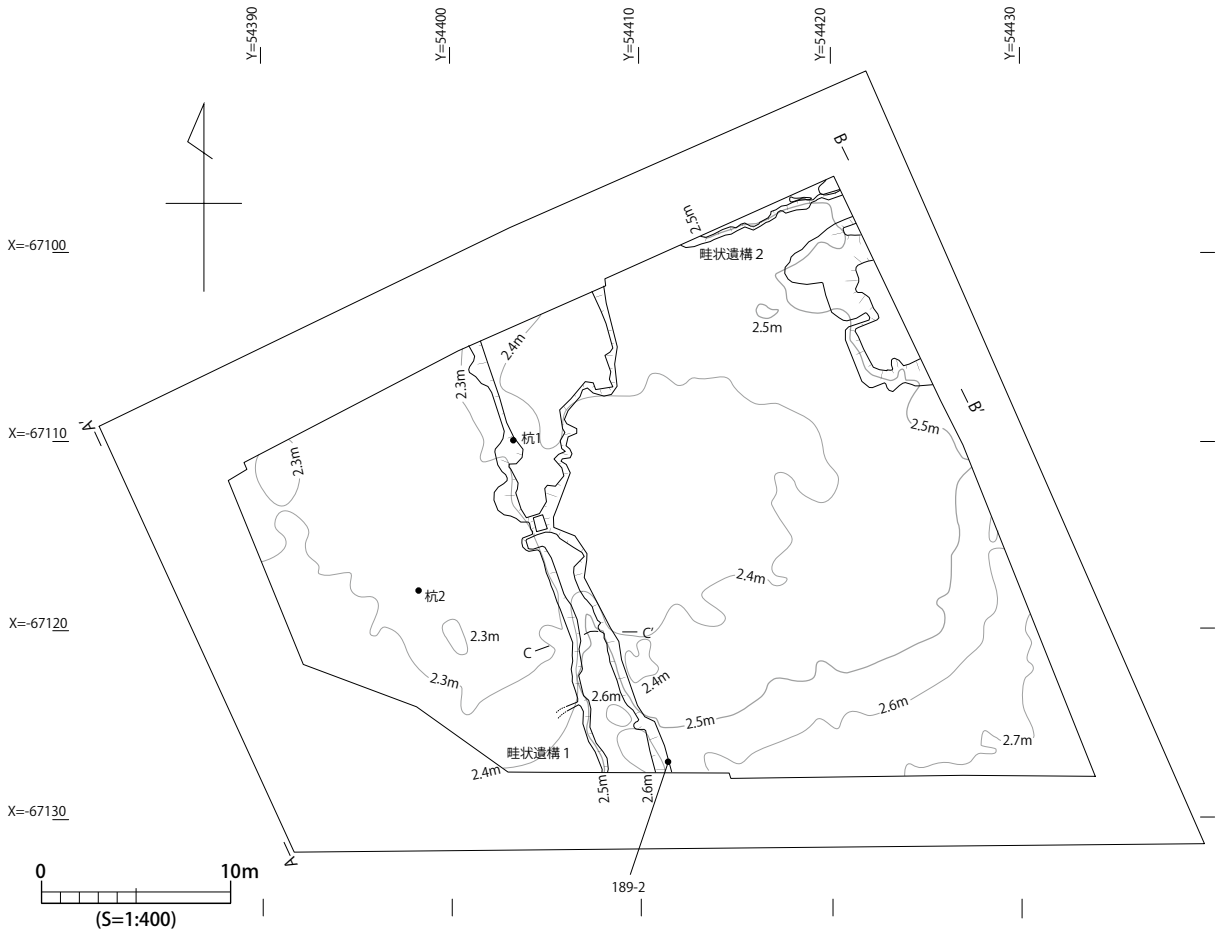
Ⅰ層は近世以降の耕作土層、造成土などである。Ⅰ - ５層は洪水砂層で、他の調査区でも同様の堆積が見られる。

Ⅱ層は、古代末から中世にかけて堆積した黒色腐植土層（いわゆる「オモカス層」）である。

Ⅲ層は暗オリーブ褐色～オリーブ黒色粘質土層である。このうちⅢ - １層については、ラミナ状に腐植土が入っており、分析の結果、自然堆積層と判断された層（第７章第５節参照）で、Ⅱ層に大別すべきであったかもしれない。Ⅲ - ２・３層は古墳時代後期から平安時代後期の遺物を少量含むもので、古代の耕作土層と考えられる。

Ⅳ層は黒色系のシルト～粘質土層で、古墳時代の遺物を含んでいる。

Ⅴ層はシルト系の堆積層である。調査区東・西壁面の土層から SR01 はこの層を切っていることが確認できた。



第 185 図　７区⑥Ⅲ - ２層上面遺構配置図

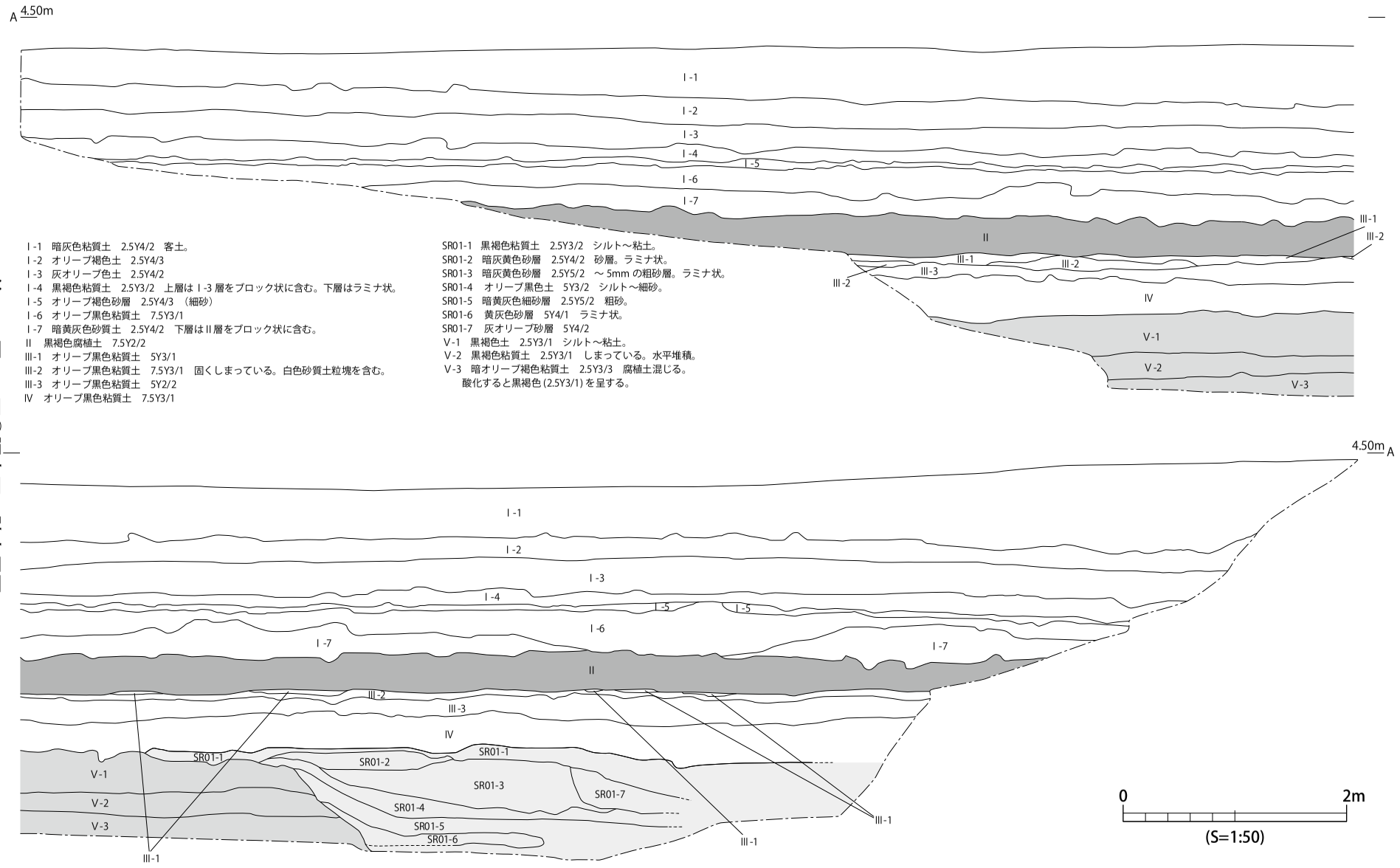
３．Ⅱ層～Ⅲ - ２層上面の調査（第 185 図）

本調査区では、前述したようにⅡ層上面から人力での掘削を行っている。これは前年度に調査された７区⑤の調査区壁面の土層断面でⅡ層直下に畦状の高まりが確認されており、本調査区においてその続きが存在する可能性が想定されたためである。Ⅱ層及び、腐植土を含むⅢ - １層を除去し、Ⅲ - ２層上面で南北方向にのびる畦状遺構１と東西方向にのびる畦状遺構２、杭２本（杭１・２）を検出した。

畦状遺構１（第 185・188 図）　調査区の中央を南北にのびる畦状遺構で、幅２～４ｍ、確認できた長さは 25 ｍ、基底部からの高さ 20㎝である。南北両端から中央部分に向かうにしたがって畦状の高まりが低くなっている。中央部分は水口状に切られていた可能性が考えられる。また中央から北側部分は畦状の高まりの東側が分かりにくく、数㎝の高低差を地形測量した結果、最大幅が約８ｍまで広がる形となったが、本来の畦の形状を示すものか疑問であり、流失・削平を受けたか、黒色腐植土層が堆積する過程で変形した可能性がある。

この遺構の性格については、幅がかなり広いものであること、古代の耕作土層で形成されていることから、水田に伴う大畦畔であったと考えられる。

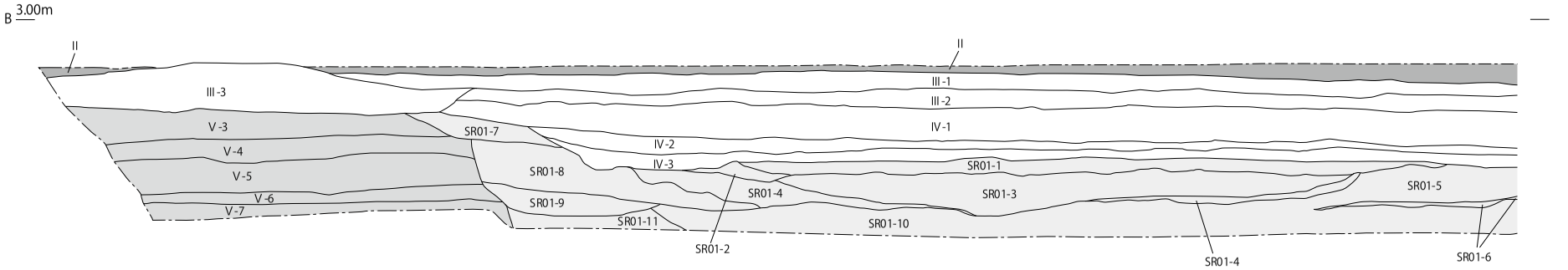
畦状遺構２（第 185 図）　調査区の北東端で東西方向にのびる大畦畔状の遺構で、畦状遺構１に対して直交している。長さは現状で９ｍ、基底部からの高さ 20㎝である。平面的には畦の北半を検出することができなかったが、調査区東壁で畦状の断面形を確認しており、ここでの下端幅は約



I -1　暗灰色粘質土　2.5Y4/2　客土。
I -2　オリーブ褐色土　2.5Y4/3
I -3　灰オリーブ色土　2.5Y4/2
I -4　黒褐色粘質土　2.5Y3/2　上層はⅠ-3 層をブロック状に含む。下層はラミナ状。
I -5　オリーブ褐色砂層　2.5Y4/3 （細砂）
I -6　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1
I -7　暗黄灰色砂質土　2.5Y4/2　下層はⅡ層をブロック状に含む。
II　黒褐色腐植土　7.5Y2/2
III-1　オリーブ黒色粘質土　5Y3/1
III-2　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1　固くしまっている。白色砂質土粒塊を含む。
III-3　オリーブ黒色粘質土　5Y2/2
IV　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1

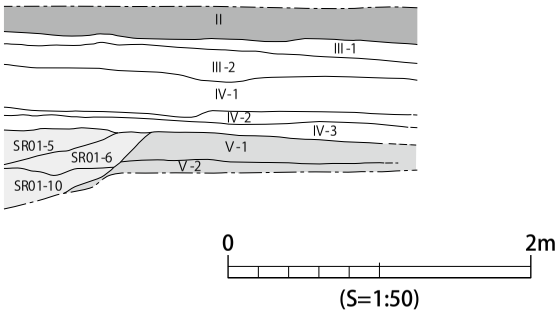
SR01-1　黒褐色粘質土　2.5Y3/2　シルト～粘土。
SR01-2　暗灰黄色砂層　2.5Y4/2　砂層。ラミナ状。
SR01-3　暗灰黄色砂層　2.5Y5/2　～ 5mm の粗砂層。ラミナ状。
SR01-4　オリーブ黒色土　5Y3/2　シルト～細砂。
SR01-5　暗黄灰色細砂層　2.5Y5/2　粗砂。
SR01-6　黄灰色砂層　5Y4/1　ラミナ状。
SR01-7　灰オリーブ砂層　5Y4/2
V-1　黒褐色土　2.5Y3/1　シルト～粘土。
V-2　黒褐色粘質土　2.5Y3/1　しまっている。水平堆積。
V-3　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3　腐植土混じる。
酸化すると黒褐色 (2.5Y3/1) を呈する。

第186図　7区⑥調査区西壁土層図

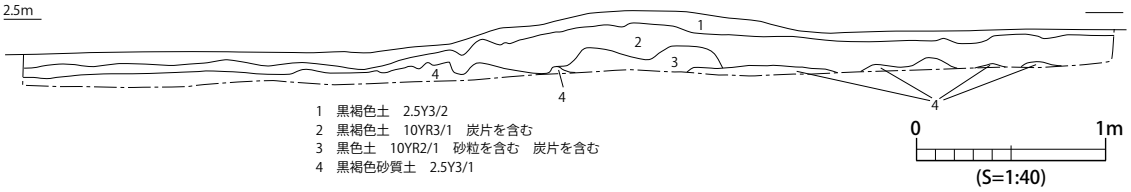


II　黒褐色腐植土　2.5Y4/2　　上層は直径 3 ㎜前後の砂粒を含む。
III-1　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3
III-2　黒褐色粘質土　2.5Y3/2
III-3　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y4/3
IV-1　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3
IV-2　暗灰黄色土　2.5Y4/2　（シルト～粘質土）
IV-3　黒褐色粘質土　2.5Y3/2　シルト～粘土。
SR01-1　オリーブ黒色土　5Y3/2　シルト～粘土。
SR01-2　オリーブ黒色土　5Y3/2　シルト～細砂。
SR01-3　暗灰黄色砂層　2.5Y5/2　～ 5 ㎜の粗砂層　ラミナ状。
SR01-4　黄灰色砂層　2.5Y4/1　ラミナ状。
SR01-5　灰オリーブ砂層　5Y4/2
SR01-6　黒褐色土　2.5Y3/2　細砂　ラミナ状。
SR01-7　黒褐色土　2.5Y3/2　細砂　ラミナ状。
SR01-8　オリーブ黒色土　2.5Y3/2　シルト。
SR01-9　灰オリーブ砂層　5Y4/2　細砂。
SR01-10　暗黄灰色砂層　2.5Y5/2　粗砂。
SR01-11　暗黄灰色砂層　2.5Y5/2　粗砂。

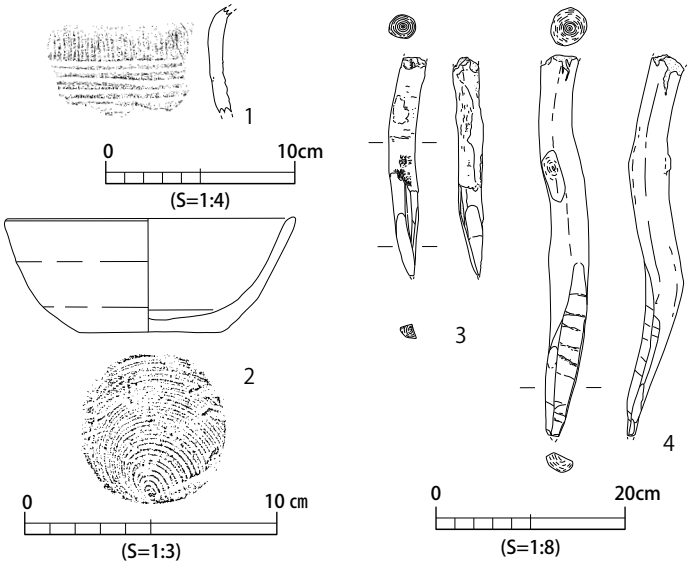
V-1　オリーブ黒色土　2.5Y5/2　シルト～粘土
V-2　オリーブ黒色粘質土　2.5Y3/2
V-3　オリーブ黒色土　5Y3/2　シルト
V-4　オリーブ黒色土　5Y3/2　シルト　粘質土とシルト質が斑になっている。
V-5　オリーブ黒色土　5Y3/2　シルト　V-3、V-4 層より粒子が大きい。
V-6　オリーブ黒色土　5Y3/1　シルト～粘土粘質土の割合が大きい。
V-7　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3　　水平な堆積。



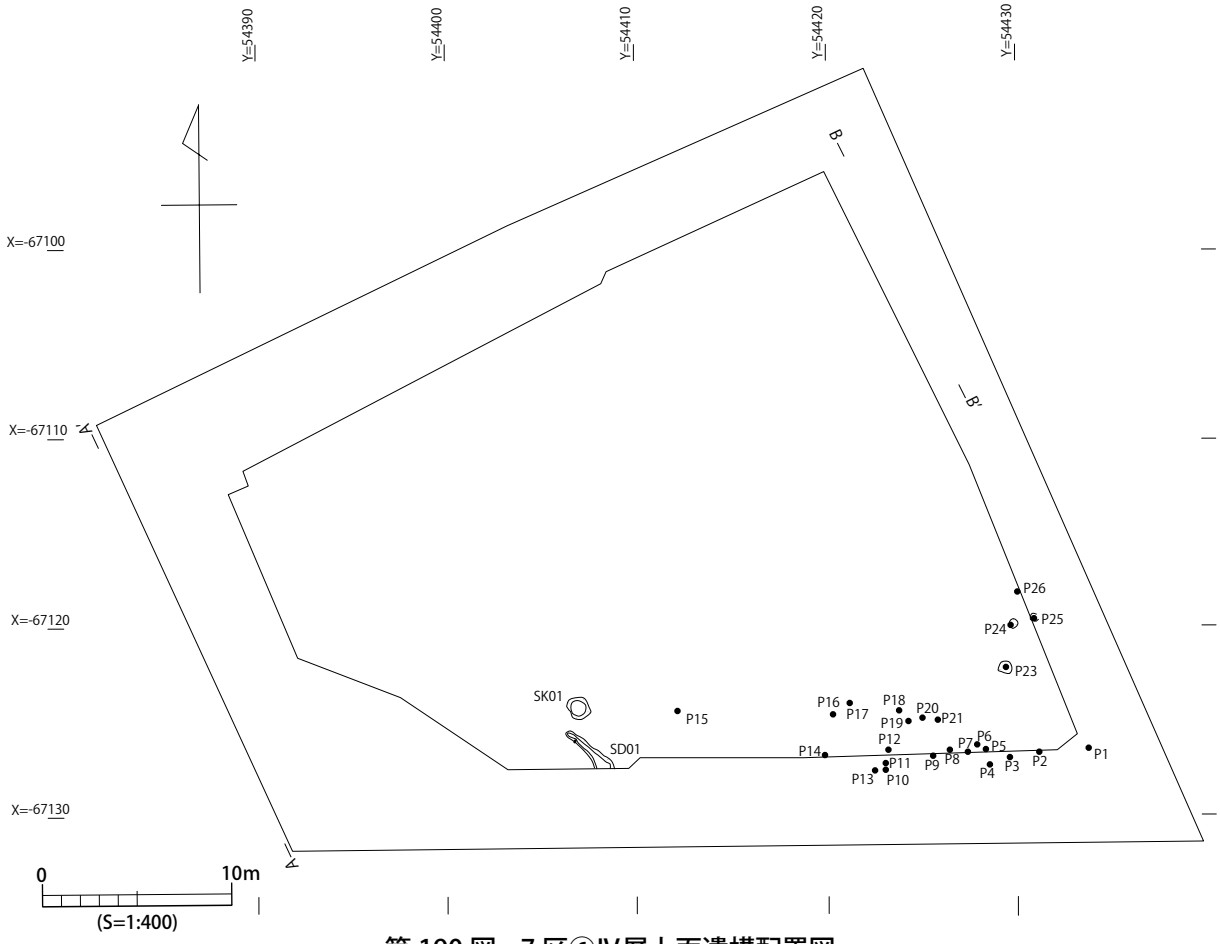
第 187 図　7 区⑥調査区東壁土層図



第 188 図　7 区⑥畦状遺構 1 土層図



第 189 図　7 区⑥Ⅲ -1 層出土遺物実測図



第 190 図　7 区⑥Ⅳ層上面遺構配置図

2.5m である。この遺構の性格は、幅がかなり広いこと、古代の耕作土層で形成されていることから、水田に伴う大畦畔で、畦状遺構 1 と直交することから同時期に造成されたものと考えられる。7 区⑤では東・中央・西区の西壁断面で畦状の高まりが確認されており、畦状遺構 2 は方向性から見てこれらと対応する可能性が高い。

なお、Ⅲ - 2 層上面の地形は、畦状遺構 1 の東側では南東端が一番高く、北及び東端も若干高くなっており中央部分が低く落ち込んだ状態になっており、畦状遺構 1 の西側は東側よりも一段低くなっていた。この面に水田が営まれていたとすれば、小畦畔で区画されたと考えられるが、そそのような遺構は確認できなかった。

Ⅱ・Ⅲ - 1 層出土遺物（第 189 図） 第 189 図 1 は弥生土器の壷で、頸部に凹線文が巡る。Ⅱ - 1 層から出土した。2 は畦状遺構 1 の上面から出土した土師器坏で、廣江編年の第 2 段階（11 世紀頃）と考えられる。3・4 は杭 1・2 である。樹皮付きの丸木材の先端部分を加工している。

4．Ⅲ - 2 層～Ⅳ層上面の調査（第 190 図）

Ⅲ - 2・3 層は古代の耕作土層と考えられる層序で、土師器や須恵器などが出土している。Ⅳ層上面では、土坑 1 基（SK01）、溝状遺構（SD01） 1 条、ピット 26 基（P01 ～ 26）を検出した。検出した遺構は全て調査区南側に位置している。

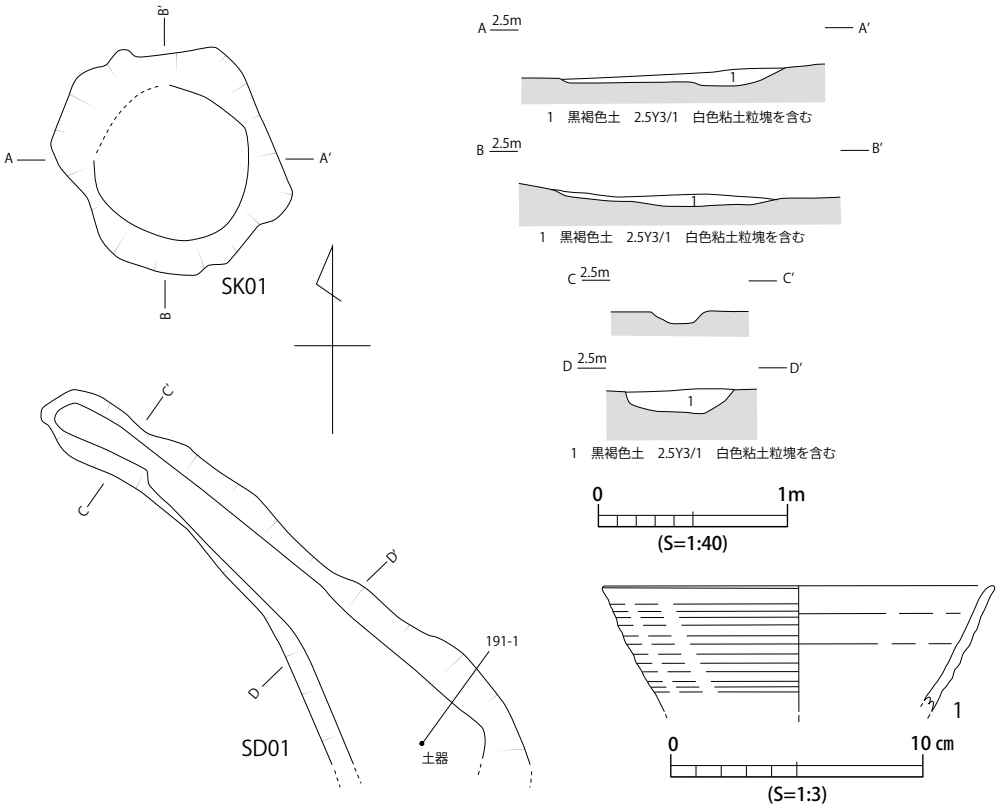
SK01・SD01（第 191 図） SK01 は直径 1.2 m、深さ 0.1m の不整円形の土坑である。SD01 は長さ 3.0 m、深さ 0.1m の弧状にのびる溝状遺構で、SK01 の南に近接している。両者の埋土は、白色粘土粒塊を含む黒褐色土で類似している。

SD01 底部から軟質の須恵器・坏（第 191 図 1 ）が出土している。岡田編年の出雲Ⅴ期に相当するものと考えられる。

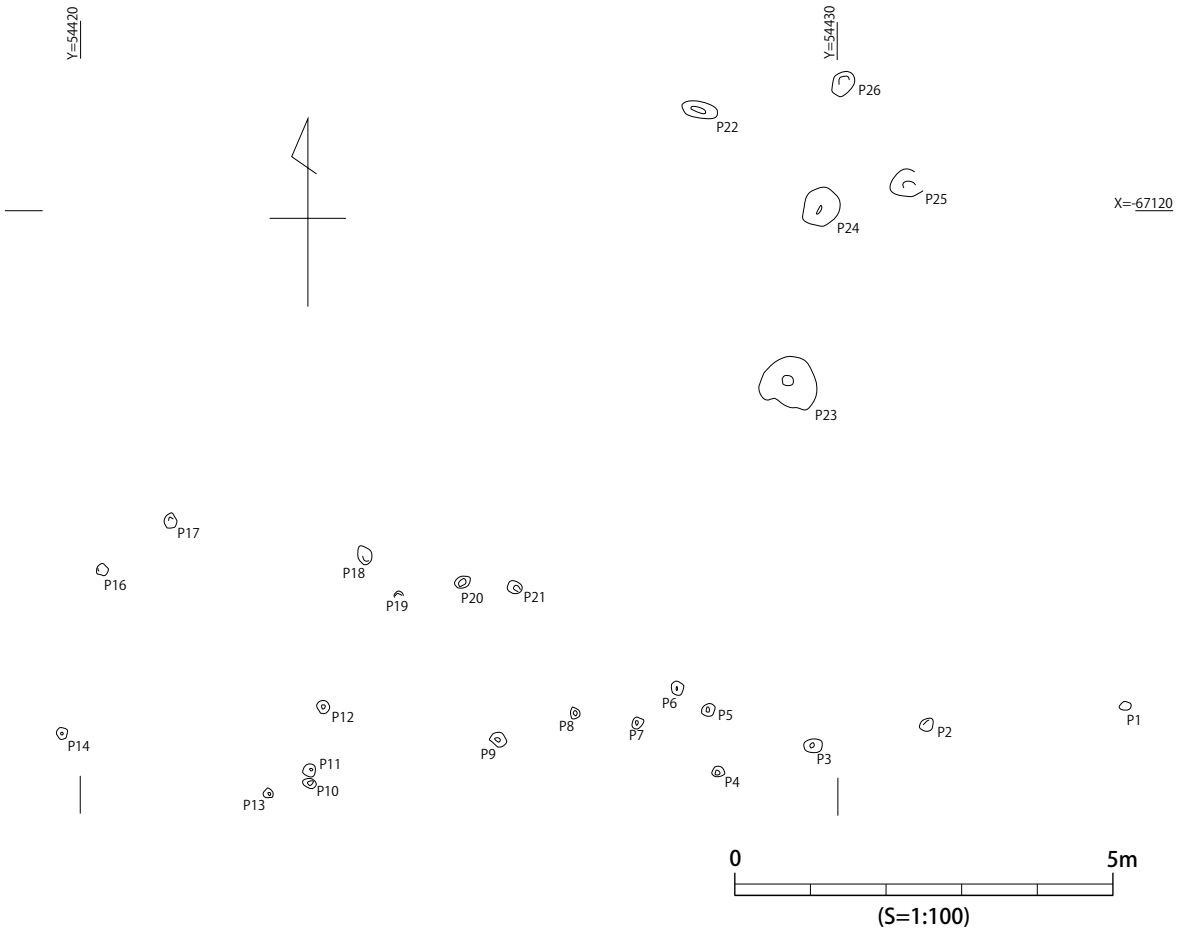
ピット（第 192・193 図） ピットの規模と埋土から、P01 ～ 22 と P23 ～ 26 の 2 つの種類に分類できる。前者は直径 0.1 ～ 0.2m で、埋土が黒色土のもので、後者は直径 0.3m 以上で、埋土がオリーブ黒色砂質土のものである。P01 ～ 22 のなかで、浅いものは人足痕もしくは獣足痕の可能性が考えられる。

Ⅲ - 2・3 層出土遺物（第 194 ～ 196 図） 第 195 図 1 ・ 2 は弥生土器の壷である。 1 は外面にヘラ状工具及び櫛状工具による沈線文、内面にハケ目調整が施されている。Ⅲ～Ⅳ様式のものと考えられる。2 は立ち上がりの短い複合口縁のもので、Ⅴ - 1 様式のものである。3 は土師器の坏で、内外面に赤色顔料（ベンガラ）が塗布され、内面には暗文風のヘラミガキが施されている。 4 は須恵器の坏蓋の口縁部で、外面の肩部に 2 条、口縁部内面のやや上がった位置に 1 条の沈線が入る。大谷晃二氏分類における A 4 ～ A6 型式に相当するもので、出雲 4 期に位置付けられる。 5 は須恵器の高台付皿で、底部外面に「林」と墨書されている。焼成はやや軟質である。岡田編年の出雲ⅣＡ～ⅣＣ期と考えられる。 6 は須恵器の甕片で、破面のうち 2 面は研ぎ具として利用されたためか磨り減って滑らかになっている。 7 は須恵器の長頸瓶もしくは水瓶の頸部で、胴部との境には突帯が貼り付けられている。 8 は軟質の須恵器坏の底部であるが、小片のため時期は不明である。 9・10 は土師器の坏である。9 は体部がほぼ直線的に立ち上がり、廣江編年の第 2 段階（11 世紀頃）のものと考えられる。10 は底部外面に板状の圧痕が認められる。

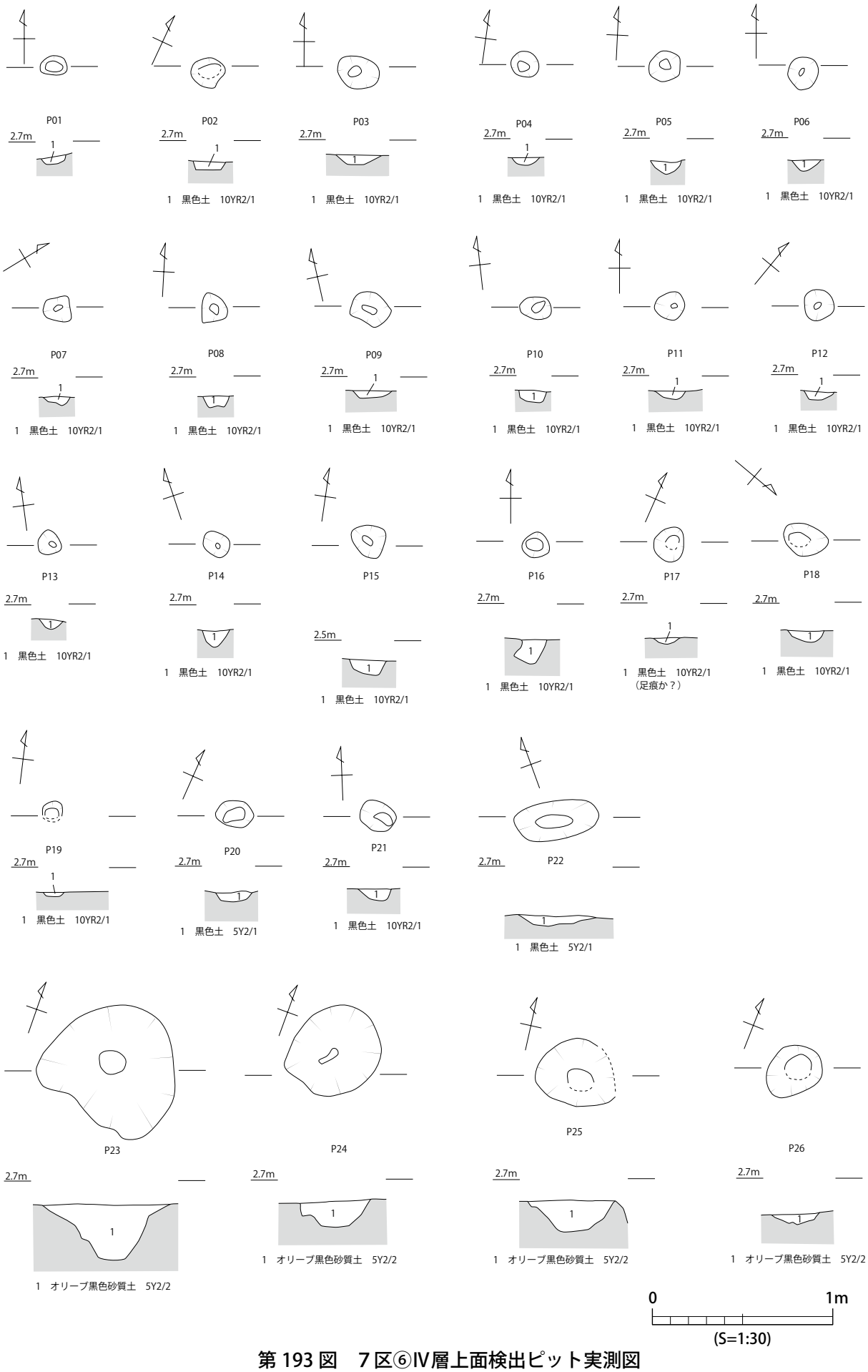
第 196 図 1 は穂摘具の木製台で、握り側が弓なりに抉れたかたちに加工されている。 2 は鉄製



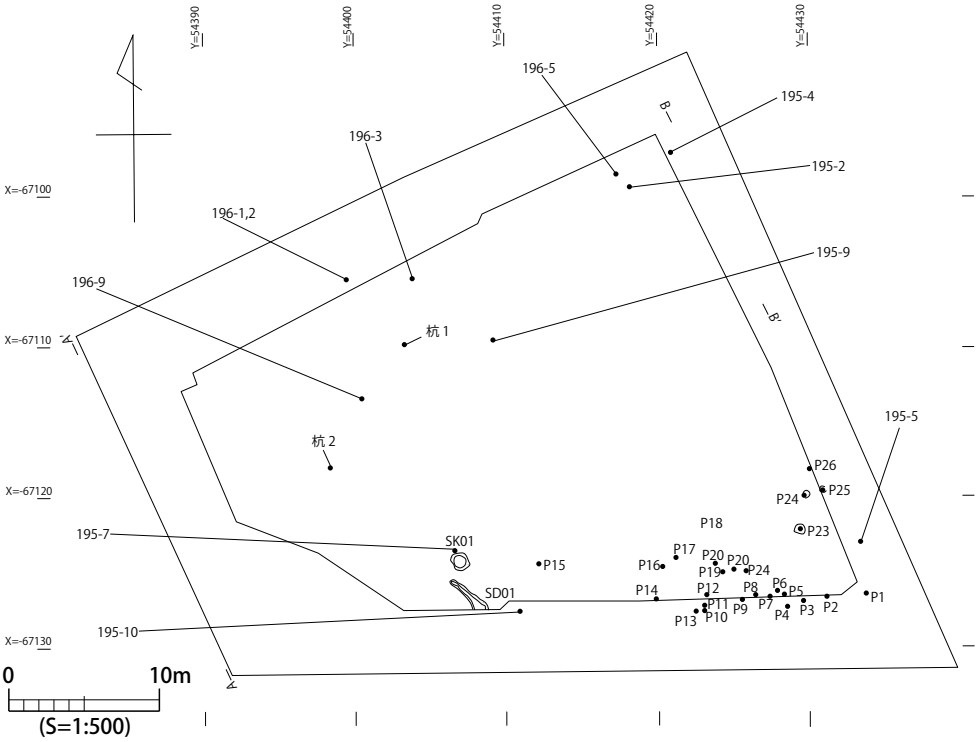
第 191 図　7 区⑥ SK01・SD01 実測図及び出土遺物実測図



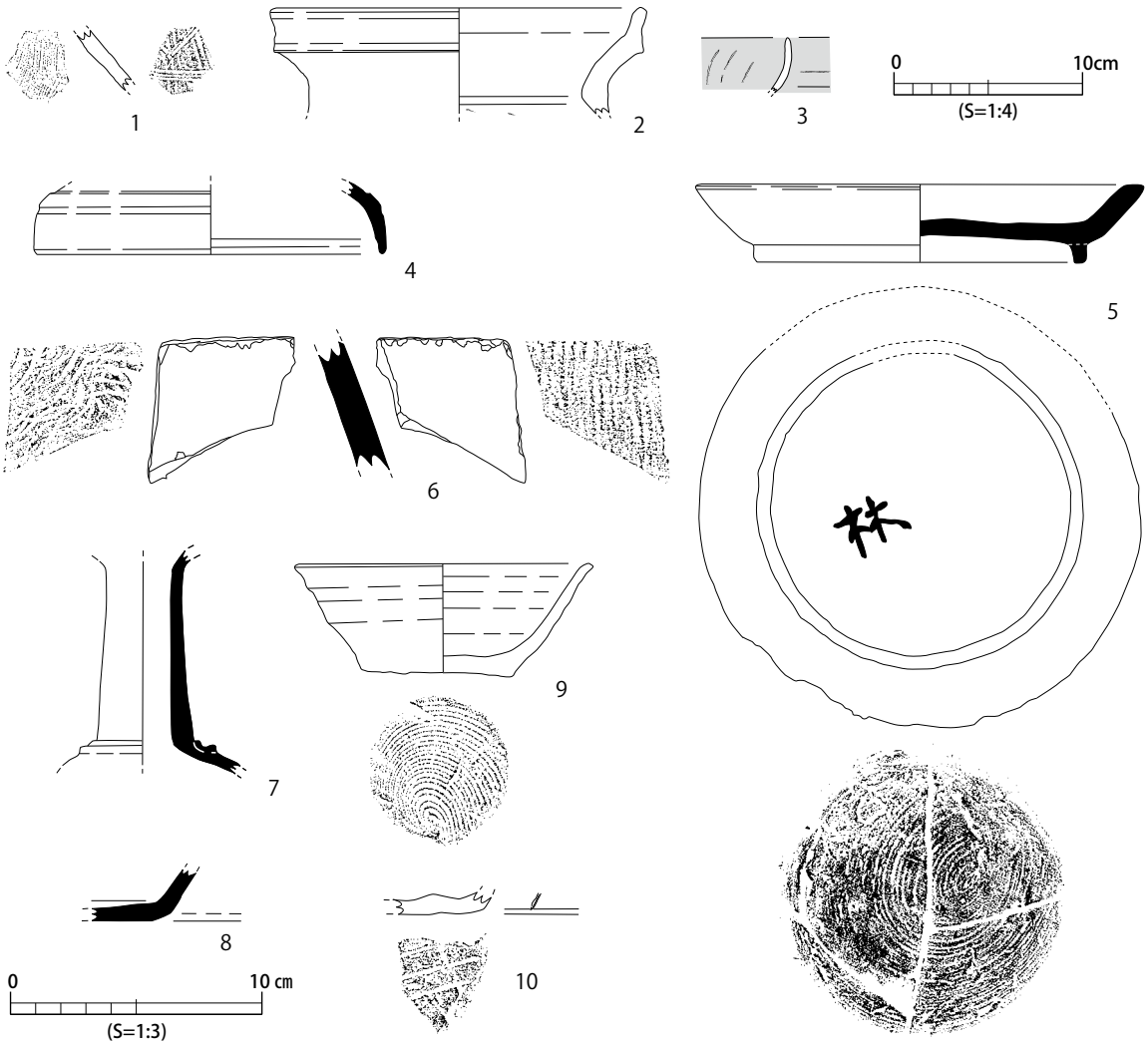
第 192 図　7 区⑥Ⅳ層上面検出ピット平面図



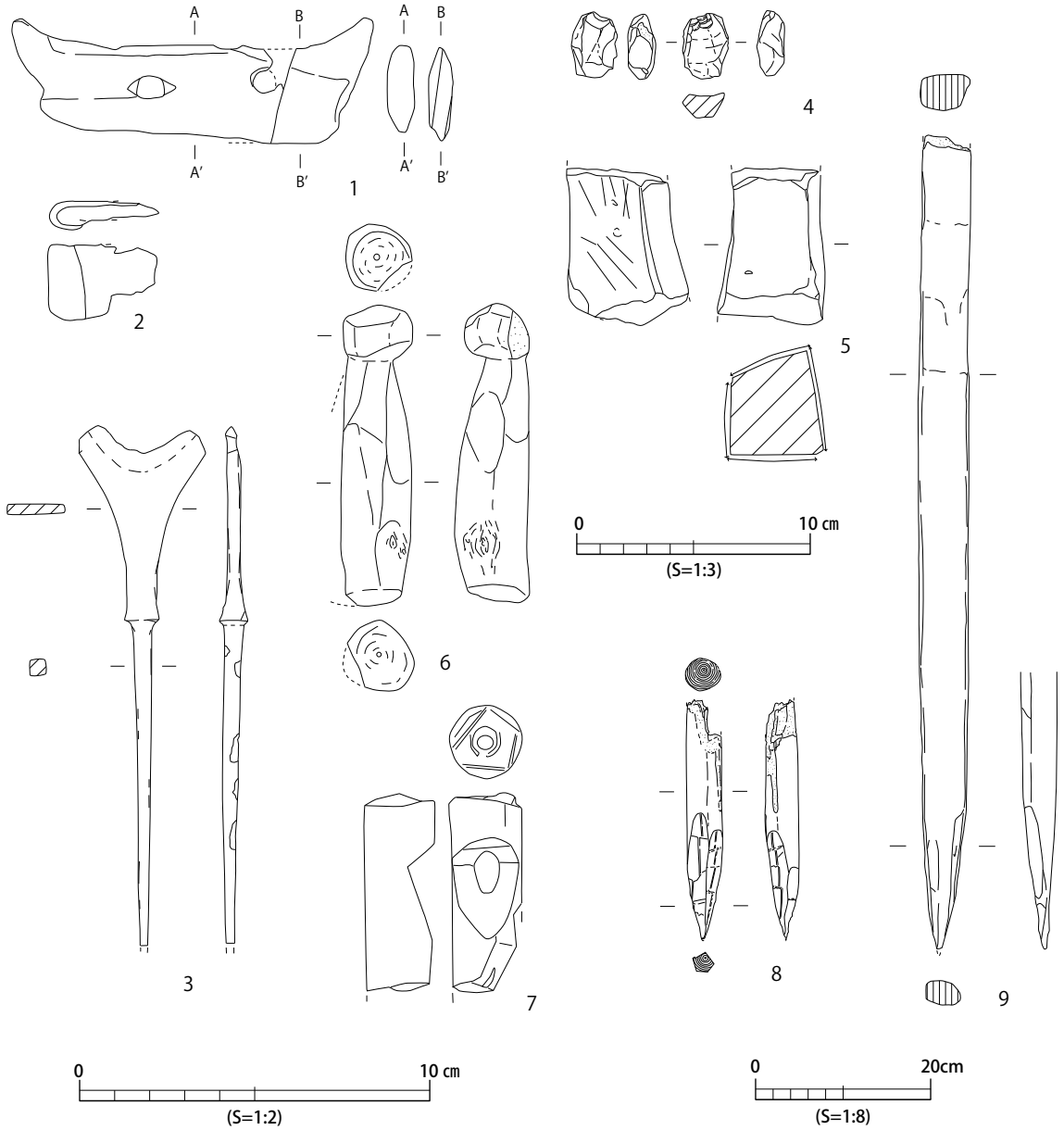
第 193 図　7 区⑥Ⅳ層上面検出ピット実測図



第 194 図　　7 区⑥Ⅲ -2・3 層遺物出土状況図



第 195 図　7 区⑥Ⅲ -2・3 層出土土器実測図

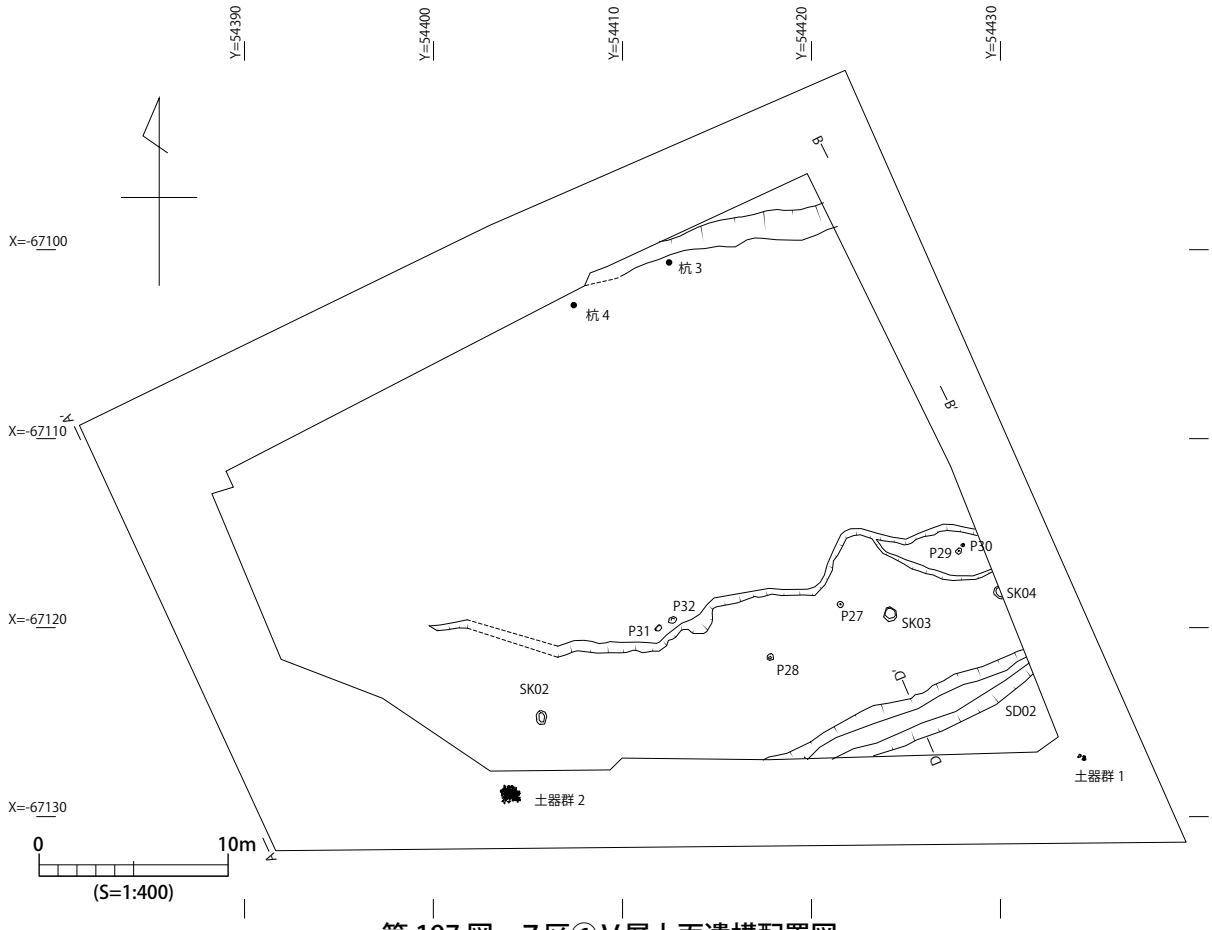


第 196 図　7 区⑥Ⅲ -2・3 層出土金属製品・石製品・木製品

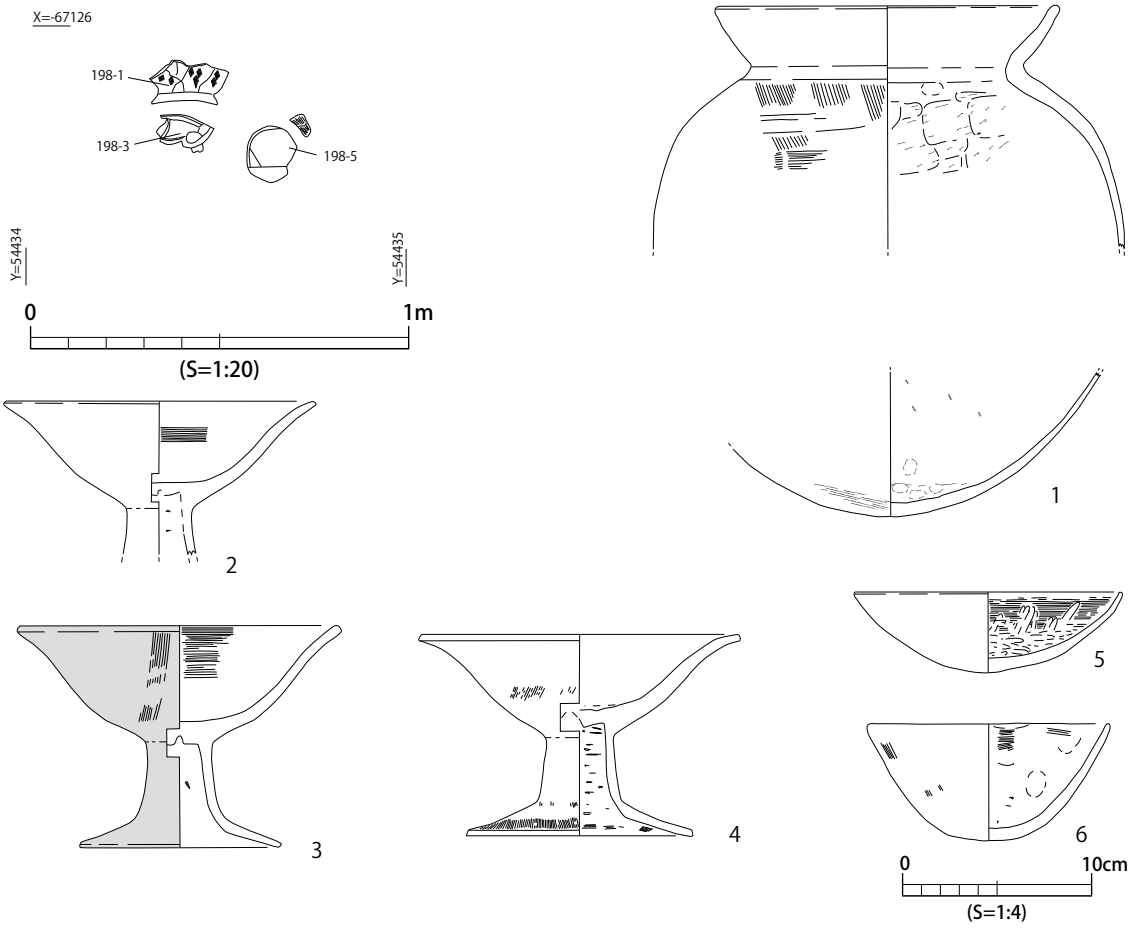
摘み鎌の破片で、板状の素材の端部をＵ字状に折り曲げて台に装着したものである。刃部側は、中央部に向かうにしたがい内湾しているようであり、使用による摩耗の可能性も考えられる。反対側は直線状に伸びている。１・２は同位置から出土しており、両者は組み合わせて使用されたものと推測される。３は雁股式の鉄鏃である。４は水晶の剥片である。５は砥石で、砥面を４面持つ。６は木錘で、丸太材の端部が頭状に削り出されている。７は丸棒状の材の中心部を約４㎜の孔が貫通した管状の製品で、側面に抉りが入れられている。８・９は杭で、８は丸太材を、９は割り材を加工したものである。９は横になった状態で出土した。

５．Ⅳ層～Ⅴ層上面の調査（第 197 図）

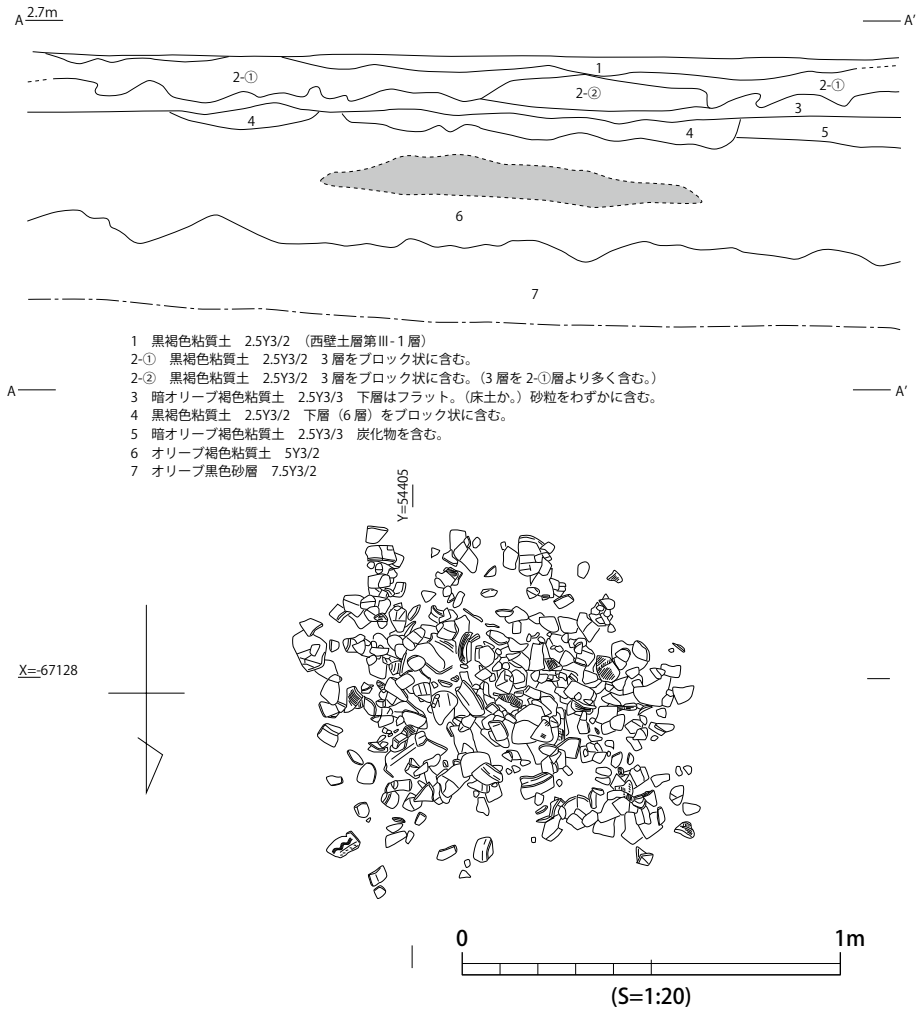
Ⅳ層は古墳時代の遺物包含層で、弥生時代後期から古墳時代中期の土器が出土した。遺物のほとんどは小片で、出土量も他の調査区に比べて少なかったが、調査区の南東隅と南西隅の２か所で土器群を検出している。このほかⅣ層掘削中に調査区北側で杭２本（杭３・４）を確認した。シルト層上面では溝状遺構１条（SD02）、土坑３基（SK02 ～ 04）、ピット６基（P27 ～ 32）を



第 197 図　7 区⑥Ⅴ層上面遺構配置図



第 198 図　7 区⑥土器群 1 平面図及び出土遺物実測図



第 199 図　7区⑥土器群２実測図

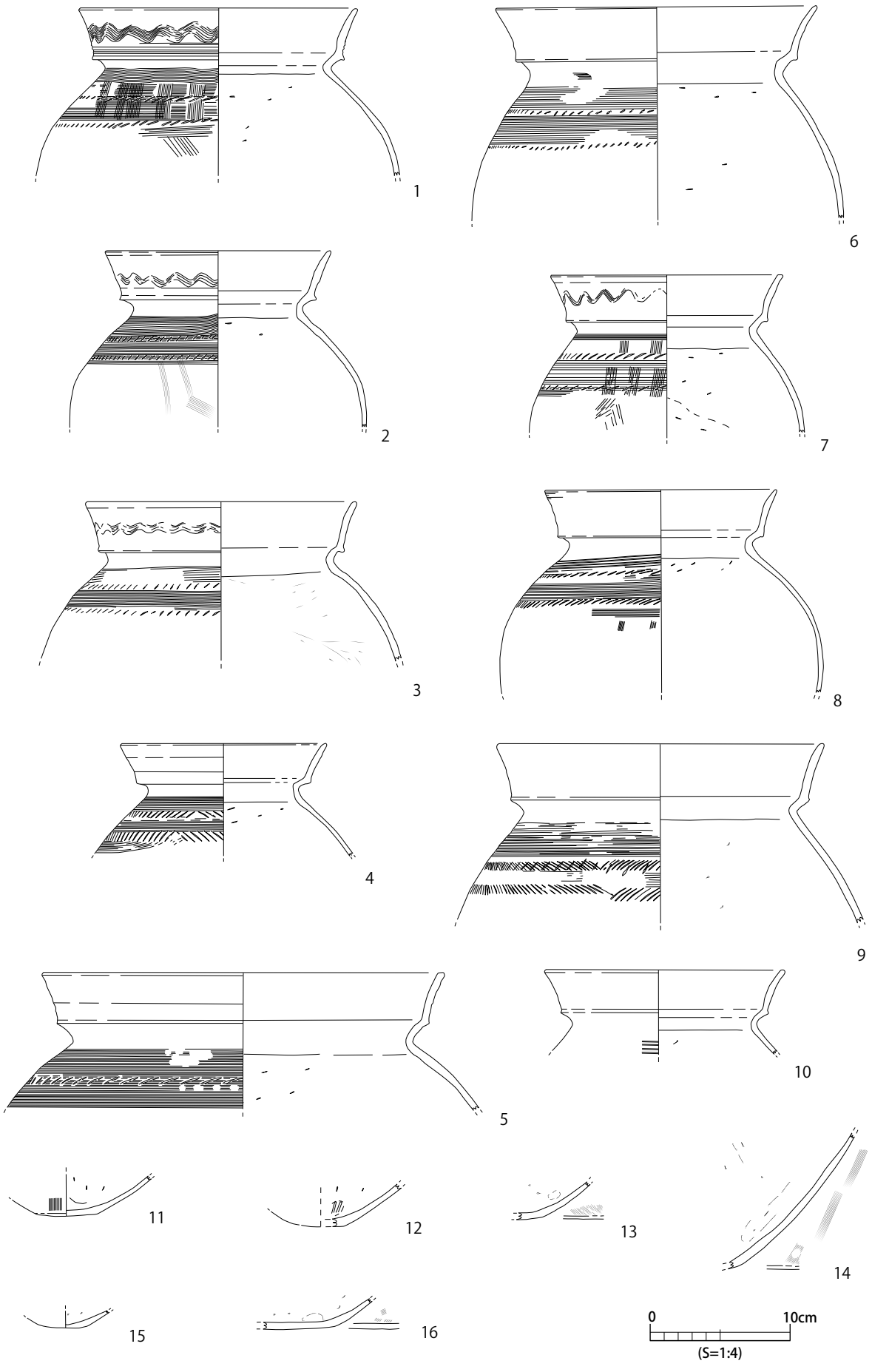
検出した。シルト層上面は、調査区北東端と南側が高く、中央部が低く落ち込んだ状態で、東側の７区⑤で検出された落ち込み状の地形が続いていることが確認できたが、西側は全体的に低くなり、落ち込みの肩は不明瞭になっている。調査区南東部の落ち込みの肩から法面にあたる部分では、古墳時代中期の赤彩土師器の高坏片が出土している。

土器群１（第 198 図）　調査区の南東隅の標高約 2.6 ｍで、東西 50㎝、南北 50㎝の範囲に古墳時代中期の土師器が１か所にまとまって出土した。第 198 図１は甕で、口縁部は内湾気味で、体部から底部にかけては丸みを持った器形をしている。２～４は高坏で、いずれも坏部が丸みを持ち、口縁部が外反する器形で、坏底部の充填技法は松山智弘氏分類のα技法である。３は外面に赤彩が施されている。５・６は坏で、５は身が浅いもの、６は深みがある椀形のものである。器面は、内面がハケ目ののちナデ、外面はナデ調整で仕上げられ、部分的に指頭圧痕も残る。

これらの時期については、坏底部の接合がα技法の高坏が残る一方で、粗製の坏も伴うことから、九景川編年の様相２に相当すると考えられる。

土器群２（第 199・200 図）　調査区の南西隅付近で、直径約１ｍの範囲で古式土師器が一括で出土した。遺物の出土したのは標高 2.2 ～ 2.3m で、第 199 図の土層断面図に網掛け部分としてその検出位置を投影して示した。土器は５㎝前後の破片に割れたものが多く、本来の形状をとどめていなかった。

出土した土器はいずれも甕で、全体として肩部に平行直線文や横方向のハケ目を施した後、貝



第 200 図　7 区⑥土器群 2 出土遺物実測図

殻やヘラ状工具による刺突文を２段巡らせている。１～３・７のように口縁部に波状文が入るものもある。

１は口縁部に８条の波状文、肩部に左下がりの貝殻刺突文が２段施されている。口縁部の波状文は他の土器より丁寧に施されている。口縁部には、波状文を施す前に、平行直線文を巡らし、さらにそれをなで消したあとが観察できる。２・３・７は口縁部には４条の波状文、肩部には平行直線文ののち左下がりの貝殻刺突文が２段施されている。２の波状文は口縁部の８割程度巡るもので、波の振幅は終息点付近では小さくなっている。７は口縁端部がなでられ、小さな面を持つ。４は肩部にヘラ状工具による上下２段の刺突文を巡らせたもので、下段は左下がりの刺突と右下がりの刺突文の切り返しがなされている。５は肩部に１段の貝殻刺突文が認められるが、肩部の途中までしか残存していないため、下段の刺突文の有無は不明である。口縁端部はなでられて緩い面を持つ。８は口縁部に平行直線文が施されたのちなで消されたあとが認められる。肩部はヘラ状工具による刺突が２段巡る。９の肩部には上下共に左下がりと右下がりの刺突文が施されており、上段はさらにその上から左下がりの貝殻刺突文が施されている。11 ～ 16 は甕の底部の破片である。いずれも丸底にはなっておらず、胴部と底部の境をなす屈曲点があり、底面はやや外側にふくらんでいる。13・16 は、底径が 15㎝以上と他のものと比べ大きくなるものである。

これらの時期は、草田編年４～５期と考えられる。

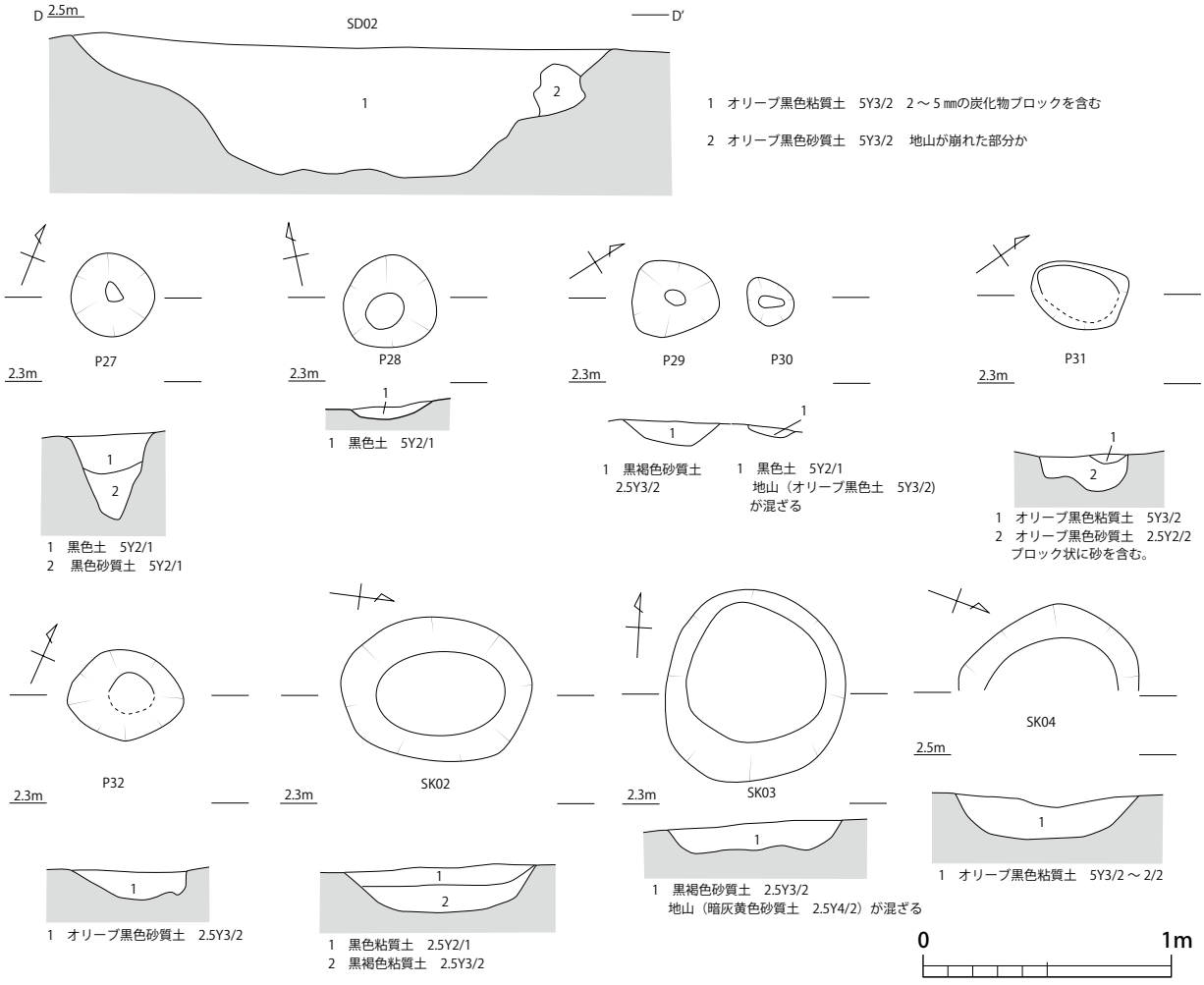
SD02（第 197･201 図） 調査区の南東端で、東北東から西南西方向に直線状にのびる溝状遺構で、東西はそれぞれ調査区外に続いており、現状で確認できた長さは 15m である。幅 2.2m、深さ 0.6m で、断面形は逆台形状を呈しており、底面はわずかに凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。埋土は、ほぼオリーブ黒色粘質土の単一層であった。遺物を伴わないため時期は特定できなかった。遺構の性格も不明である。

土坑･ピット（第 197･201 図） 調査区の南側において、Ⅴ層上面で土坑３基（SK02 ～ 04）、ピット６穴（P27 ～ 31）を検出した。土坑は直径 0.7 ～ 0.8m、ピットは 0.2 ～ 0.4m の規模を持つもので、これらの性格等は不明である。

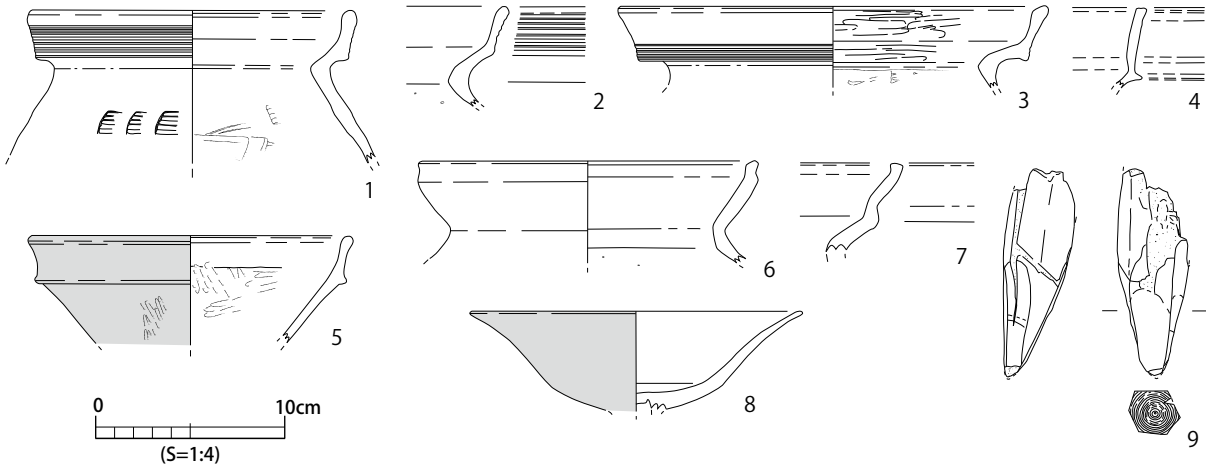
Ⅳ層出土遺物（第 202 図） １～３は弥生土器の甕で、１・２は口縁部に７条の平行直線文を巡らせており、３は口縁部に平行直線文が施されたのち上部がなで消されている。１は肩部に貝殻による連続刺突文が施されており、外面は全体的に煤が付着している。１～３はⅤ - ２様式に属する。４は古式土師器の甕で、口縁端部に平坦面を持ち、草田６～７期のものと考えられる。５は器台である。外面には水銀朱により赤色塗彩が施されている。６・７は土師器･甕の口縁部である。６は、口縁部上段が短く立ち上がる退化した複合口縁のもので、九景川編年の分類では甕 B 類に相当する。７はやや退化した複合口縁であるが、内面の段は明瞭であり、甕 A 類の範疇に収まるものと考える。口縁端部は内側につまみ出されている。８は土師器の高坏で、坏部は丸みを持ち口縁部が外反するもので、高坏 A ｂ類と考えられる。外面はベンガラにより赤色塗彩されている。６～８は古墳時代中期の土器と考えられる。９は杭の先端で、丸太材を加工したものである。

６．Ⅴ層の調査（第 203 図）

調査区の排水溝の掘削中に、Ⅴ層上面よりも低いレベルで遺物が出土したため、Ⅴ層を面的に掘削して、下層における遺物の出土状況と遺構の有無を確認することとした。自然河道（SR01・



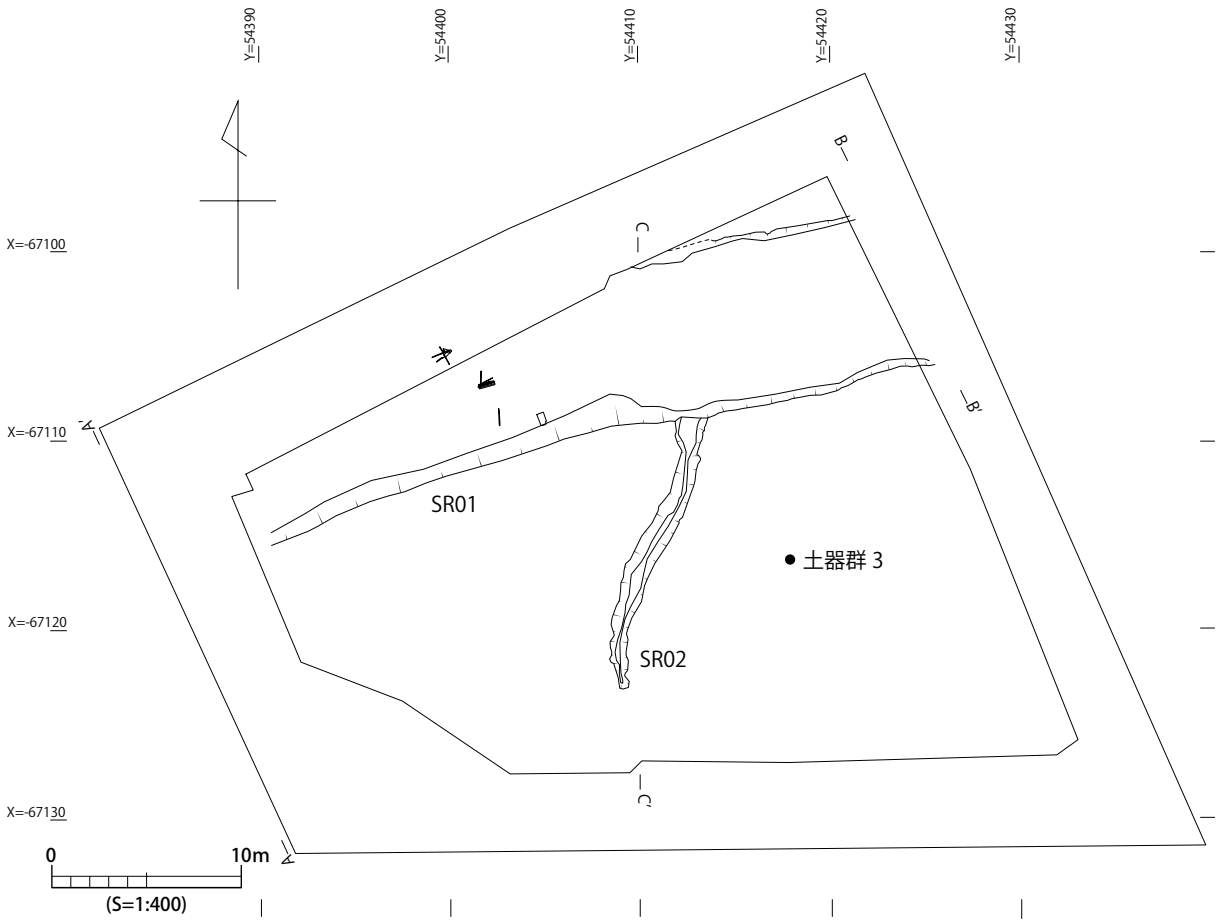
第 201 図　7区⑥Ⅴ層上面検出 SD02・土坑・ピット実測図



第 202 図　7区⑥Ⅳ層出土遺物実測図

02）と土器群 1 か所を検出した。

SR01（第 203 ～ 207 図）　調査区の北側で検出された東西方向にのびる自然河道で、確認できた長さは 36 mで、幅 9 mである。Ⅴ層を面的に掘削した段階で検出したが、調査区壁面及び第 204 図の土層からⅤ層を切って流れていたことが分かる。調査区東壁土層断面における河道北肩の標高は 2.25 m、南肩の標高は 1.85 mで、調査区西壁土層断面における河道南肩の標高は 1.8m である。河道堆積層を東壁側で標高 1.25m、西壁側で標高 0.8m まで掘削したが底面を検出することはできなかった。



第 203 図　7 区⑥Ⅴ層掘削段階遺構配置図

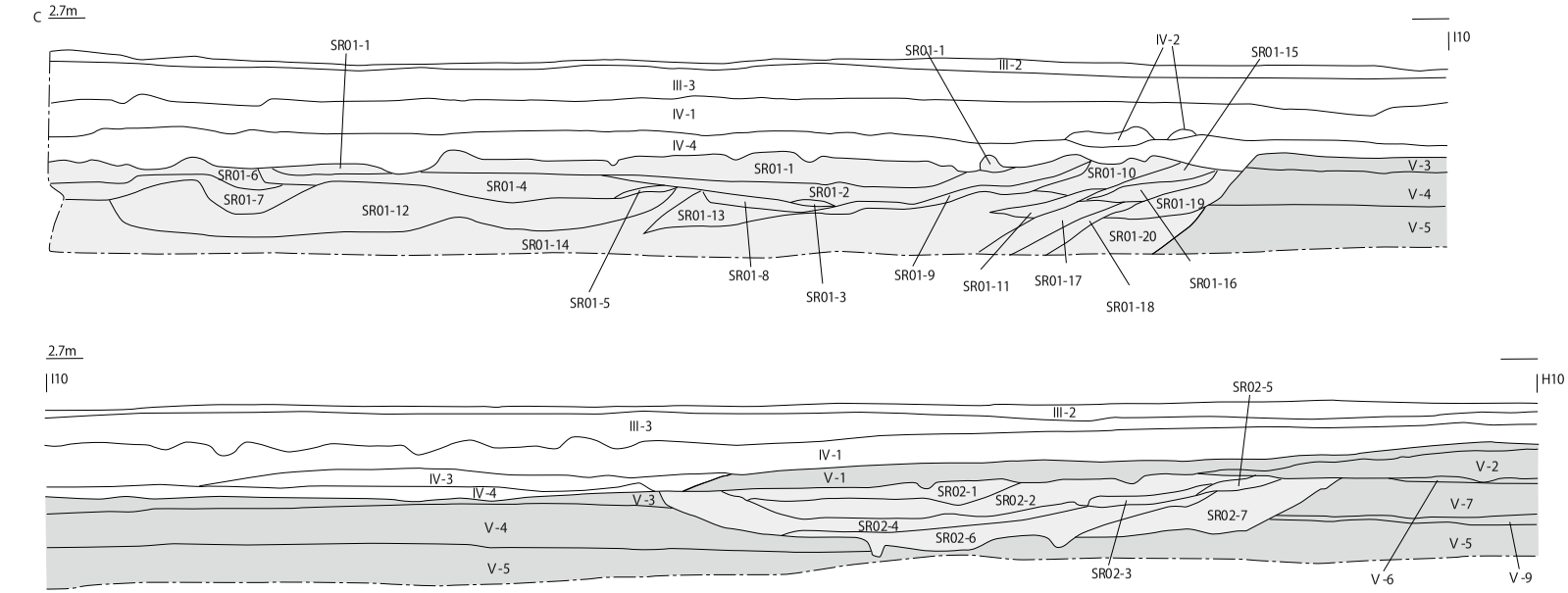
堆積状況は、上位にシルト質の堆積や粘質土層が認められ、下位には花崗岩由来の粗砂層や、ややきめ細かな砂層が見られることから、下位の堆積段階には水流がかなり強い時期と緩やかな時期があり、上位の堆積段階には水流があまりない状態で河道が埋没したものと推測される。

河道堆積層中から弥生土器や木製品、杭が出土している（第 206・207 図）。

第 206 図 1 は弥生時代前期の甕で、口縁部は体部から逆Ｌ字状に短く屈折しており、端部に刻目が施されている。胴部内外面はハケ目調整がされており、胎土には大粒の砂礫を含む。２～４は弥生時代中期の甕である。３は口縁部は「く」字状に外方に屈曲しており、口縁端部が丸く収められているもので、Ⅲ - １様式に属する。３・４は口縁端部が上方に拡張され、２条の凹線が施されたもので、Ⅳ - １様式に位置付けられる。５～８は弥生時代後期の甕である。５は口縁部が内傾し、３条の凹線が施されている。６は口縁部が短く直立気味に立ち上がり、口縁部には３条の凹線文、肩部には刺突文が巡るものである。７は、外反する口縁部に７条の擬凹線文が施されたもので、外面には煤の付着が甚だしい。８は口縁部が外反するもので、全体的に磨滅しており、その影響もあるのかもしれないが、口縁部に文様は認められない。５・６はⅤ - １様式、７・８はⅤ - ２様式のものと考えられる

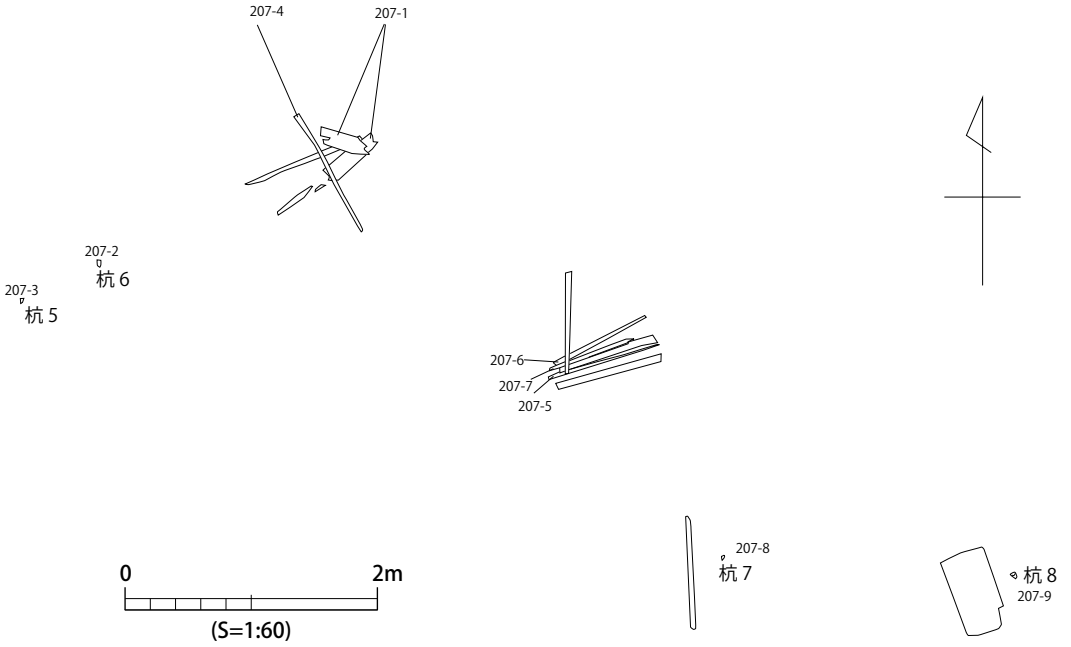
第 207 図 1 は矢板状の木製品で、図手前側が斜めに切断されている。中央に方形の枘孔が穿たれており、転用材と考えられる。２・３・８・９は杭である。これらは河道堆積層に刺さった状態で出土したものであり、河道埋没後に打ち込まれたものと考えられる。２が第 205 図の杭６に、３が杭５に、８が杭７に、９が杭８にあたる。２・３はミカン割り材を、８・９は丸太材を加工

第204図　7区⑥南北ベルト（I 10- F 10）土層図

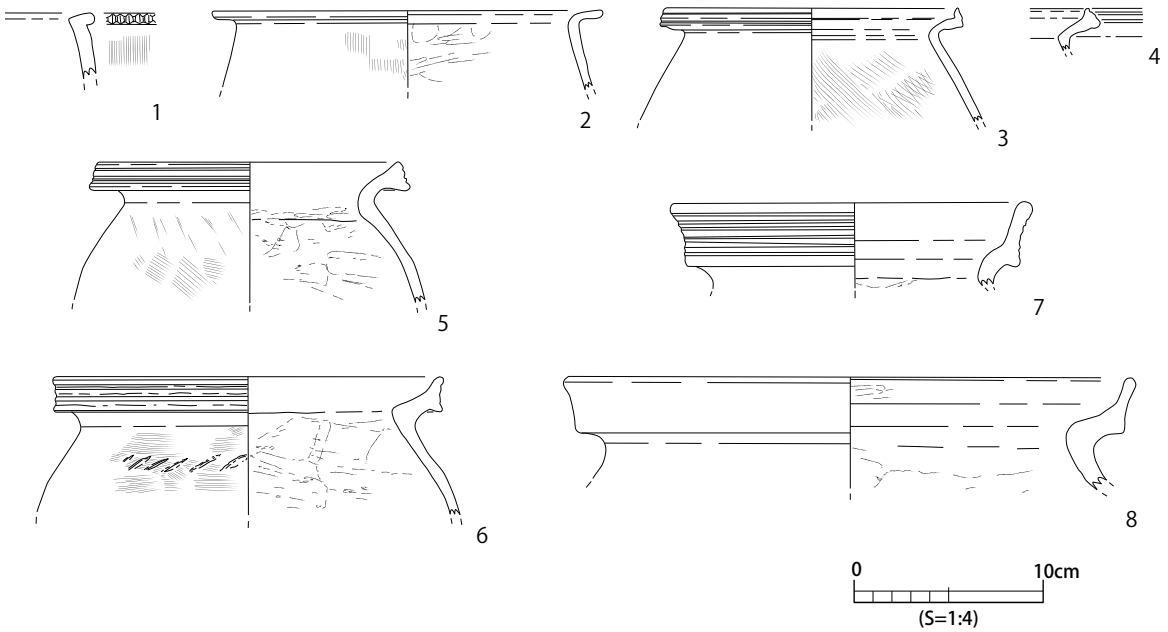


III-2　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1
III-3　オリーブ黒色粘質土　5Y2/2
IV-1　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1
IV-2　オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3　黄白色粒子を含む。
IV-3　黒褐色砂質土　2.5Y3/2
IV-4　黒褐色土　2.5Y3/1
IV-5　黒色土　2.5Y3/2
V-1　暗オリーブ褐色砂質土　2.5Y3/3
V-2　暗黄灰色土　2.5Y4/2　（シルト）しまっている。
V-3　暗黄灰色土　2.5Y4/2　（シルト）水平堆積。
V-4　黒褐色土　2.5Y3/2　シルトと粘質土が互層状に水平堆積している。
V-5　黒色粘質土　2.5Y2/1　暗灰色層を含む。水平堆積。しまっている。
V-6　黒褐色粘質土　2.5Y3/2　砂をわずかに含む。
V-7　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3　（細砂～シルト）粘質土をところどころに含む。
V-8　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3　（細砂～シルト）粘質土をところどころに含む。
V-9　黄灰色土　2.5Y4/1　（細砂～シルト）きめ細かい。

SR01-1　黒褐色土　2.5Y3/1　（細砂）わずかに縞状に砂層を含む。
SR01-2　黒褐色砂質土　2.5Y3/1　～直径 2 ㎜の砂粒を含む。
SR01-3　黒褐色土　2.5Y3/1　（細砂）
SR01-4　灰黄色砂層　2.5Y6/2　直径 1 ～ 5 ㎜の砂粒を含む。
SR01-5　オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3　黄白色粒子を含む。
SR01-6　黒褐色土　2.5Y3/2　（シルト）きめ細かい。
SR01-7　灰黄色砂層　2.5Y6/2　直径 1 ～ 5 ㎜の砂粒を含む。
SR01-8　暗灰黄色砂層　2.5Y5/2　～直径 2 ㎜の砂粒を含む。
SR01-9　黒褐色砂質土　2/5Y3/1　きめ細かい。（直径 1 ㎜以下）
SR01-10　黒褐色砂質土　2/5Y3/2　きめ細かい。（直径 1 ㎜以下）
SR01-11　オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3　黄白色粒子を含む。
SR01-12　暗灰黄色砂　2.5Y5/2　～直径 15 ㎜の礫を含む。
SR01-13　暗灰黄色砂　2.5Y5/2　～直径 15 ㎜の礫を含む。
SR01-14　灰黄色砂質土　2.5Y6/2　きめ細かい。（直径 1 ㎜以下）
SR01-15　黒褐色砂質土　2.5Y3/2　きめ細かい。（直径 1 ㎜以下）炭化物を含む。
SR01-16　黄褐色砂質土　2.5Y5/3　（細砂～シルト）
SR01-17　黒褐色砂質土　2.5Y3/2　きめ細かい。（直径 1 ㎜以下）炭化物を含む。
SR01-18　黄灰色砂質土　2.5Y4/1　きめ細かい。
SR01-19　黒褐色砂質土　2.5Y3/2　きめ細かい。　炭化物を含む。
SR01-20　黄灰色砂質土　2.5Y5/2　きめ細かい。
SR02-1　暗灰色土　2.5Y4/2　（細砂～シルト）きめ細かい。互層状に堆積している。SR02-02 より粘性が強い。
SR02-2　暗灰色土　2.5Y4/2　（細砂～シルト）きめ細かい。互層状に堆積している。
SR02-3　黒褐色土　2.5Y3/1　（シルト～粘土）粘性がある。
SR02-4　黄灰色土　2.5Y4/1　（シルト）互層状に堆積している。SR02－2 より粘性が強い。
SR02-5　暗灰黄色土　2.5Y4/2　（シルト）SR02-4 層に似る。
SR02-6　黄灰色土　2.5Y4/1　（シルト～粘土）砂と粘質土が互層状に堆積している。炭化物を含む。
SR02-7　暗黄灰色土　2.5Y4/2　（シルト～粘土）炭化物を含む。SR02-6 より粘性が強い。



第 205 図　7 区⑥ SR01 木製品出土状況図

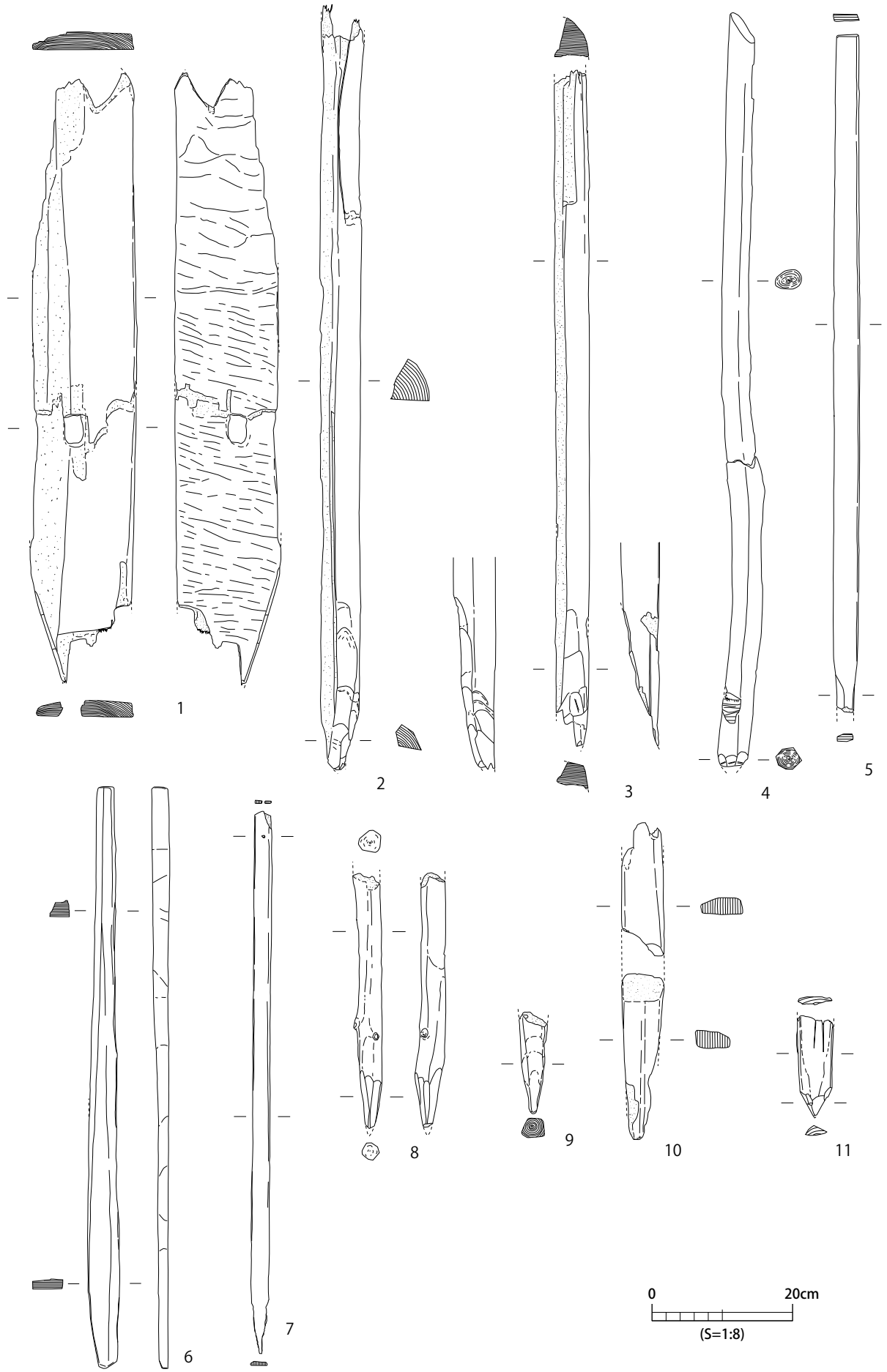


第 206 図　7 区⑥ SR01 出土土器実測図

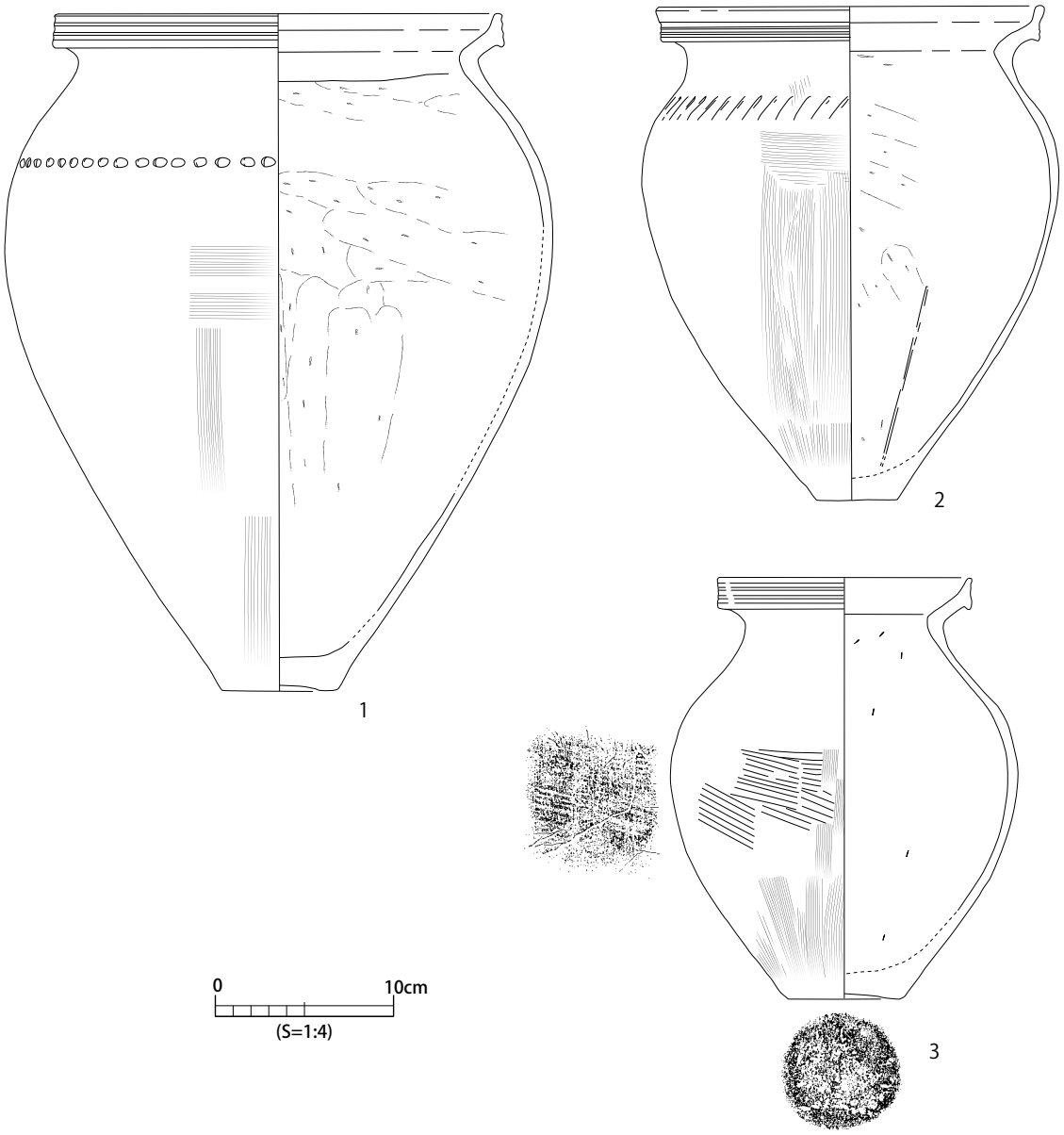
したものである。3は一方の面が弧状に整ったかたちで加工されていることから、大径木を分割して加工した柱材を、さらに分割して杭に転用したものと推測される。4は丸太材の先端部分が削り出されたもので、杭のようである。5～7・10・11は板状の材で、先端を尖らせるように加工されている。7は上端付近に小さな穿孔が見られる。

SR01の堆積時期は、出土遺物の最も新しい遺物の時期から後期中葉頃と考えられる。堆積層中に含まれる花崗岩起源の粗砂は、6区砂礫層でも見られることから、6区側からもたらされた可能性が考えられる。

SR02（第 203・204 図）　調査区のほぼ中央部に位置し南から北へSR01に向かって流れている流路跡である。Ⅴ層を面的に掘削してから平面形を検出しており、現状で確認できた長さは14 m、幅1.4 mである。第204図の土層から、Ⅴ - 1・2層の堆積より古く、Ⅴ - 3層以下を切ってい



第 207 図　7 区⑥ SR01 出土木製品実測図



第 208 図　7 区⑥土器群 3 出土遺物実測図

ることがわかる。上端の標高は 1.9m で、深さは 0.4m である。埋土は細砂やシルトが見られ、粗砂層は堆積していない。

土器群 3（第 203・208 図）　調査区中央部からやや東よりのⅤ層中の標高 1.7 ～ 1.8m で、3 個体分の弥生土器が横倒しの状態で 1 か所にまとまって出土した。土器の出土した層位は SR01・02 よりも下層にあたる。それぞれの土器の上半は破損しているが、下半は原形を保っていた。

1・2 は弥生土器の甕である。1 は口縁部に 3 条の凹線文、肩部には列点状の刺突文が施されている。2 の口縁部には 3 条の凹線文、肩部にはヘラ状工具による刺突文が施されている。胴部最大径以下の器壁は比較的薄く仕上げられている。3 は弥生土器の壷で、口縁部は 3 条の凹線文が施されている。胴部最大径を器高のほぼ中央部にとり、胴部外面中央にはタタキ痕が確認できる。底部外面はややくぼんでおり、焼成前に付いたと考えられる縄の痕が見られる。

これらはいずれもⅤ - 1 様式に属するものである。　（伊藤　智）

第５節　小結

７区の調査では、弥生時代から中世初頭までの遺構・遺物を確認することができた。ここでは本書で報告する７区④・⑤・⑥のほかに、既報の７区①・②・③の調査成果も含めて各時代の様相をまとめることとする。

１．弥生時代後期中葉以前

この段階の遺構・遺物はほとんどないが、７区⑥では灰色シルト（Ⅴ層）中に弥生時代後期前葉の土器群が存在し、この土層を切るかたちで流路跡が（SR01・02）が確認された。SR01 では少量ながら弥生土器片が出土しており、最も新しい遺物は後期中葉に位置付けられる。また、SR01 の堆積には花崗岩質の砂礫も見られた。これらの点は、6 区の下層で確認された砂礫層と共通する。6 区砂礫層は弥生時代後期中葉に斐伊川の堆積作用によって形成されたものであり、SR01 は 6 区周辺を流れた河道から枝分かれした可能性がある。

２．弥生時代後期後葉～末葉

この段階でも遺構・遺物は多くないが、人間の活動の跡が徐々にみられるようになる。７区⑤ではⅤ層中から弥生時代後期後葉～末頃の遺物が出土しており、土器群 1 では後期後葉の土器が一括性の高い状態で検出された。７区⑥でも後期末頃の土器群が 1 か所確認されている。７区④では後期後葉～末頃の南北方向にのびる流路（SR01）が確認されており、杭列を伴っていることから人工的に掘削された可能性もある。この周辺で水田の開発が行われたのかもしれない。

３．古墳時代前期～中期

７区④では前述した SR01 と重複するかたちで古墳時代前期の溝（SD01）が掘削されており、前代から引き続いて水路が改修・利用されたものとみられる。

古墳時代中期には遺構・遺物の数量はピークに達する。東側では７区③・⑤で南北方向の流路がのびており、その西の７区⑤・⑥では東西に帯状にのびる落ち込み状地形からこの時期の遺物が出土している。また、南西の７区①でも溝（SD01・02）や土坑が検出され、まとまった遺物がみられる。建物跡など居住を明確に示す遺構はないが、７区①には井戸跡とみられる土坑も存在することから、周辺に居住域があった可能性は高い。落ち込み状地形や７区① SD01･02 周辺では、管玉・ガラス小玉や、𤭯・高坏などの須恵器、赤彩土師器が出土するなど、一般集落の遺物のあり方と比べるとやや特異な様相を示しており、水辺での祭祀行為も想定される。

４．古墳時代後期～中世初頭

古墳時代後期になると遺物は急減し、遺構も明確にこの時期と言えるものは存在しない。こうした様相は奈良時代頃においても同様である。しかし、全体的に遺物が少ない中で、墨書のある須恵器が 3 点出土したのは注目される。墨書の内訳は「林」が 2 点、「邊」が 1 点である。

古代末～中世初頭の遺構として、７区②と７区⑥で幅２～４m の畦状遺構を確認している。これらは黒色腐植土（Ⅱ層）を除いた段階で検出したものである。７区②の畦状遺構と７区⑥畦状遺構 1 は平行しており、両者の間隔はほぼ 1 町（約 109m）に相当する。また、７区⑥には両者と直交する東西方向の畦状遺構２も存在し、７区⑤でも調査区の土層断面からその続きが存在したと推定される。これらは条里地割に基づく大畦畔の可能性が考えられるものであるが、詳細については 6 区の様相とあわせて次章で検討することとしたい。　（東山信治）